

2013. 08. 30.

岩手大学地域防災研究センター
第5回地域防災フォーラム

災害文化部門活動報告： 防災教育が映し出す災害文化

山崎友子



平成25年度の主な活動

1. 震災直後の活動：岩手県沿岸部の学校の被災状況調査のまとめ、と田畑ヨシさんの紙芝居による災害文化の形成についての論文
「2011年3月11日ーあの日の学校と防災の積み重ね」
「津波体験の語り継ぎー田畑ヨシさんの紙芝居 つなみ」
⇒『震災からの教育復興ー岩手県宮古市の記録』（国立教育政策研究所監修，悠光堂）に掲載
2. 宮古市田老の小中高校における防災・復興教育の実践的研究
 - 1) 宮古北高等学校における高大連携授業：Communicational Language Project
(⇒2013年8月全国英語教育学会課題フォーラムで発表)
 - 2) 田老第一中学校における中大連携授業：津波の実際から防災を考える
 - 3) 田老第一中学校津波体験作文集『いのち』の編集、岩手大学地域防災センターからの発行
3. 田老における市民・教育関係者による災害文化の継承に関する研究
⇒Oberlin Univ. International Conference で発表
岩手大学地域防災センター国際フォーラムで発表

研究の基本的枠組み

1. 災害とは

災害は、異常な自然現象を介して地域の持つ矛盾を顕在化させる。

(山崎憲治, 1996)

水、雨、大雨、洪水 ~ 水害

脆弱性(vulnerability)

2. 防災教育の目指すところ

①地域を知る(課題、特性)

②自然現象のメカニズムを知る

③地域の課題を解決し、新しい地域の創造に向かう

3. 災害文化とは

「文化とは、危機に直面する技術である」(山口昌男, 2009)

災害文化とは、異常な自然現象の発生の可能性と地域の持つ矛盾に対する「意識・気づき」を日常の中に持ち、危機にあたり、地域の矛盾・課題を解決し新しい地域を創造しようとするダイナミズム (山崎, 2013, 岩手大学地域防災センター国際フォーラム)

「田老の住民はあの荒波に鍛えられて育ち、人に負けたくない精神でみな頑張って復興のため努力してあの住み良い町を復興させたと思われます。各家庭の土地を何割か提供して碁盤の目に割られた町並みができ、又、地区毎に高台に避難道路も整備されこんなに素晴らしい住み良い町に住んでいる幸せを感じておりましたのに・・・」(田畑ヨシ, 2011)

復興に対する考え方

○政府の復興に対する考え方

東日本大震災復興構想会議「復興への提言～悲惨のなかの希望～」

(2011年6月25日発表)

←東日本大震災復興基本法2011年6月24日施行)

原則2:被災地の広域性・多様性を踏まえつつ、地域・コミュニティ主体の復興を基本とする。国は、復興の全体方針と制度設計によってそれを支える。

⇒被災地の意思の尊重、被災地域・コミュニティのコンテクストや被災の状況を出発点に

○被災地での聴き取り:被災の状況は、地域ごと、学校ごと、被災者ごとに異なる
(2011年7月, 岩手県南部, 教育委員会)

⇒2年半経過して:スタンダードの作成が可能なのか?

震災直後に分かった課題・対応の個別性、直感を振り返るとき



研究活動のフィールド

1. 宮古市田老：平成15年「津波防災の町」宣言、東信一町長
昭和8年大津波後防浪堤建設
避難路の整備、防災無線の完備等の備え

田畑ヨシさんの紙芝居「つなみ」(1979年、54才)

平成18年(社団法人全国海岸協会より「海岸功労者」として表彰
『津波太郎』という世評に抗っての努力

牧野アイさんの作文「津波」(1933年、11才)

担任の作文指導→吉村昭著「三陸海岸大津波」(初版1984年)に所収
『津波残り』同士の結婚、防災訓練時に放送等

田老町大運動会

2011年3月11日大津波：181名の犠牲者(全壊1609戸／宮古市全体3669戸)

⇒ 先進的な防災と「災害文化」の町のケース・スタディ

田畑ヨシさんの紙芝居による語り継ぎ

(岩手大学「津波の実際から防災を考える」2006年)



1933年と2011年の被災後の田老

田畑さんの描いた田老 (1933)



「早く夜があけるといいなあ。」と
おもっているうちに、
だんだんあかるくなり、
山からおりてみると、みんな家はなく、
海だけがたかく青くすんで、
ざんがいといやなにおいがしていました。
お寺の前には、なんにんもけがをした人たちがうめき、
流れた人が
そのままごえて死んでいました。
よっちゃんは、「田老はもういやだ…
海のない所にゆきたい。」と
おもいました。

2011年震災直後の田老 (写真撮影 山崎)



牧野アイさんの作文：田老尋常小学校, 1933年12月
担任は佐々木耕助先生

「そして、とうとう私は独りぼっちの児になったのです。」



研究活動のフィールド

2. 激甚被災地の学校

A) 地域の被災 + 校舎の被災と避難 ⇒ 地域住民とともに避難

B) 地域の被災 ⇒ 地域住民の避難所としての学校

⇒ 学校の再開

● 子どもがいるから教育機関が必要なので・・・

○ 教育機関がなければ、地域住民は戻れないから → 一刻も早く

◎ 教育機関における子どもの成長が希望を与える

⇒ **地域社会のための学校**

(運命共同体、同志的關係 = 「災害ユートピア」)

防浪堤を越え市街地になだれ込んだ津波 奥の白い建物が田老第一中学校

2011年3月11日 畠山昌彦氏撮影



田老第一中学校校庭に避難していた人達の避難ルート
中学生は保育園児や高齢の人達を助けながら避難
犠牲者ゼロ



災害文化の醸成・継承と伝播

田老第一中学校の3.11避難、救援活動

防浪堤：自然観、校歌3番：歴史、命てんでんこ：生き方

瓦礫の中でのH23年度入学式での生徒会長村井旬くんによる新入生歓迎の辞

「・・・校歌の3番に私たちの進むべき方向が示されています。

防浪堤を仰ぎみよ

試練の津波 幾たびぞ

乗り越えたてし 我が郷土

父祖の偉業や 跡つがん

田老の先人たちの跡を継ぐのは私たち田老一中生です。私たちはどんなときでもあきらめず、笑顔を忘れず、今までよりも強くて温かい田老一中を、みんなの力でつくり上げていきましょう。

頑張れ田老！（オー！）頑張れ一中！（オー！）」

（『おばあちゃんの紙しばい つなみ』p.50）（校歌作詞 駒井雅三）

活動1

『いのち 宮古市立田老第一中学校 津波体験作文集』の発行



- 佐々木力也校長

「震災から学んだことを表現することがこれから必要です。風化が再び悲劇を生むとすれば、田老一中の役割は極めて大きい。その中心は、何といても自分の命をしっかりと守ること、そして、他の人の命を支え守ることの大切さを伝えること、そして、田老の未来の姿を語り、復興への夢を描くことだと思います。皆さんにお願いしたいことは、命の大切さや復興へのねがいを、日本はもとより世界中の人たちに伝え、表現する活動を、今から少しずつ準備してほしいことです。」

2012年度1学期終業式

- 2011年度田老第一中学校で学んだすべての生徒(130人)が津波体験を作文に



作文の分析

<生徒作文のキーワード>

- 「生きなければならない」
- 「千年に一度の震災を乗り越えた素晴らしい勇者」
- 「僕は漁師になる」
- 「命てんでんこ」

<作文指導の成果>

- ○津波に負けないという決意
 - 父祖の偉業や跡継がんといい歴史認識
 - 態度価値の獲得(思いやり、協力、やさしさ)
 - 地域の中学生在が層として地域社会に対する使命感を獲得
- ⇒「災害ユートピア」を持続的な目標に



作文指導の意義

- 被災した児童の個としての自立
- 地域社会における防災意識の継承
- 被災した児童の成人後における社会的存在としての意識の高揚
- 社会全体に対する防災の啓蒙

⇒災害文化の継承、発展(醸成)

災害文化の「伝播」

(作文集の出版、田老第一中学校の盛岡・東京での語り部活動)

活動2

震災直後の調査のまとめ沿岸部学校の被災状況調査のまとめ

- ①岩手県沿岸部の学校の避難、学校管理下での犠牲者ゼロ
 - ← ○「異常」の察知とマニュアルによらない即時の判断・行動
 - ← **地域の特性の理解**
 - マニュアルの作成と事前の備え
 - ⇒「公助」+「共助」+「自助」
 - (事前+災害時+救援時+復旧時+復興時)
 - ⇒ **先進的な優れた教育実践**
- ②「自助」「共助」を可能にする生き方としての「命てんでんこ」
- ③「命」をゴールとする教育の「復興」
『震災からの教育復興－岩手県宮古市の記録』

活動3

防災教育の研究・実践：異校種を貫く授業

中大連携授業1（田老第一中学校）：

「津波の実際から防災を考える」（岩手大学共通教育科目）



活動4

中大連携授業2(田老第一中学校):語り継ぐことの意義 (岩手大学教育学部英語教育専門科目)



活動5

高大連携授業(宮古北高校): 内容＋スキル

復興の中心となる生徒の能力開発のための授業研究・実践
(岩手大学教育学部専門科目)



グループ活動を支援する学部学生と留学生



高校生の満足度

4:大変そう思う 3:少しそう思う 2:あまりそう思わない 1:全くそう思わない

米国の大学生との名刺交換の授業について

- 1) 今日の英語の授業は楽しかった 3.9
- 2) 一生懸命授業に参加した 3.8

International Recipe Fair の授業について

- 1) ALTの先生とのポーカルタは楽しかった 3.9
- 2) 外国の人たちと交流することは楽しいと思った 3.9
- 3) レシピの交換ではグループで協力して、ALTの先生に伝えることができた 3.7

今後に向けて

防災教育は災害文化の形成に関わり、新しい地域の創造に向かう。

- 地域独自の課題に向けた**防災学習**を
= **学習者を主体とした防災のための学習**から新しい地域の創造が始まる
- 被災地の教育:被災者の獲得した「災害ユートピア」の思想+科学的な知見
(「ショック・ドクトリン」に批判的思考を加える力) = 「確かな生きる力」 鍵:地域を知る
 - ・・・被災地に残る生徒に対して:**ローカルな課題からグローバルな視座と活動を可能にする力(グローバル)の開発**
被災地を離れる生徒に対して:**将来(子育て、介護、老後)戻りたくなる町づくり**
- 子どもの視座**から復興を考える

「被災地の教育活動のコンテクストや現在の状況を出発点にすることこそが、本来の「教育復興」「学校開発」に迫る筋道かもしれません。・・・悲惨な事態発生の中かで学校教育再建に向かうには、震災以前の教育活動にどう戻るか、という観点を乗り越え、震災を糧とした取り組みをどう切り開くか、という問いこそ重要なのかもしれません。」(葉養,2012:188~189)

震災直後の思いを原点に



激甚被災学校の被災体験教員数の変化

	H22年度	H25年度継続在職者数
宮古市立田老第一中学校	14名	4名
激甚被災学校 (14小学校、5中学校)	224名	82名

佐々木耕助先生と牧野アイさん達児童



2010年9月
岩手大学科目

「津波の実際から防災を考える」



被災地のみなさまの
研究活動へのご協力
心より感謝申し上げます

一時も早い復興を
願って～

参考文献

- 岩手大学地域防災研究センター. 2013. 『いのち 宮古市立田老第一中学校津波体験作文集』
- 国立教育政策研究所. 2012. 『震災からの教育復興ー岩手県宮古市の記録』悠光堂.
- 田畑ヨシ. 山崎友子監修. 2011. 『おばあちゃんの紙芝居つなみ』産経新聞社.
- 田老町教育委員会. 2005. 『田老町史～津波編』文化印刷.
- 葉養正明. 2012. 「学校開発を見据えた教育復興～明日の日本へ」『震災からの教育復興』pp. 186~191. 悠光堂.
- 山口昌男. 2009. 『学問の春』平凡社.
- 山崎憲治. 2012. 「学校開発を見据えた教育復興～命を守る教育と災害文化の形成」『震災からの教育復興』pp. 192~199.
- 山崎憲治. 1996. 『都市型水害と過疎地の水害』築地書館.
- 山崎友子. 2012. 「命てんでんこの語り継ぎー田畑ヨシさんの紙芝居 つなみ」『季刊 東北学』第30号, pp. 79-90. 柏書房.
- 山下文男. 2008. 『津波と防災ー三陸津波始末ー』古今書院.
- 吉村昭. 1984. 『三陸海岸大津波』中公文庫(中央公論新社).
- ナオミ・クライン (幾島幸子・村上由美子訳). 2011. 『ショック・ドクトリン 惨事便乗型資本主義の正体を暴く』上下. 岩波書店.
- レベッカ・ソルニット (高月園子訳). 2011. 『災害ユートピアーなぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』亜紀書房.
- P.P. Karan & Shanmugam P. Subbiah ed., 2012. *The Indian Ocean Tsunami*. Cambridge University Press India.